特別
へ13
3533
3

へ13
3533
3

昭和三十一年一月十一日購入

御茶の水図書館

新法 倭耶鄭下之巻

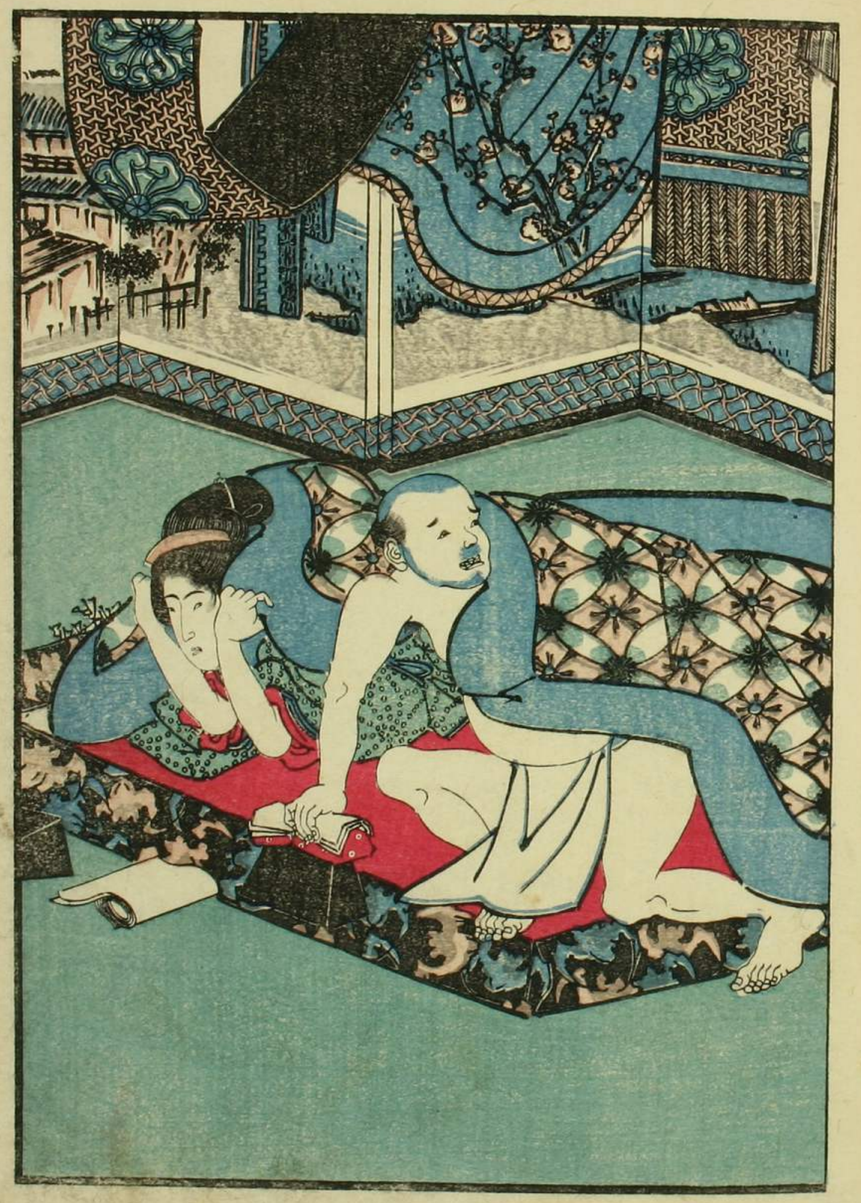
浪花 袁野黒人 編

同所 篠屋昼也 校正

蒙蒙庵蓮

二回

先陰の移るるの楊弓屋の矢より早く。既に十五日の日数を経て。爰
恥づ掛物迫くに。栄屋へ指迫で。近日結びと義妓来
社こぞりて々るに。爰酌酒奥の上。義妓の義吉といふ女性
冊へ迫爰の契約結びるに。若るの小寸若天とさるる
乗の三づ乃付つ。告々るにぞ。ふでもよんとも
ふへども。ひぞ〳〵乃袁白ば袁白ば。俄に仇至



夢助歌妓ゐ
戯れ
福山ゐ寐
らく図

癪を起し。一間より引こもりくれて。爰助大いに驚き病床へ
らんとすれど。引籠山を避て鶴山なんどのよふなる乳の多い
乳の乳臭ひ方に逆しまたびたびぐ癪がおりまた義
吉さんとどこぞで喧でも出なんで。とト襖を隔て立切れ
だ。爰助大いに困て。仲居お富と孔さまくと絞れども。
見もせず。穴の狐よ。中ぞうしひの函事。敢て矢
吏ふ逆せざれだ。爰助孔幇間弁慶を呼にゞ爰
何と皆の衆。三井の衣裳も出来揃く今朝持込の物物笠
まで。洞ふくして。ちまぐ悟乳の癖癪ぐどふ糸宮ぐ

画線よ成そふなどふぞ機嫌を直ぬ社八有まえう。トうれ
のそれもの。そうていひそれバ「モシ且那。金斗おなぐ通ぬきう」
ぐんしやの嵐吉ちを
遍るされまたよ。ぐ愛つまたい後八姫ふられぬよ
なそれまセ「サアおれもたるむ。ぐやの。ぐ。はんさん勝ち
きての芝ふ列。ゆくきんと面性八せまん。どうでちを文の機嫌を
してたも「よろちふぐざりまた私ぐ一間ぐ出ぐ見せまセふ
爰「ツリヤどふして「ミイ縁八密るとんてようぐた。爰ぐ他を
内密用。先ちを文さんの一間ふぐざるぐ。社代の背ち社を孫の
岩戸の乳よなどぐ。西の橋ふの間ぐ且那とちぐめ私ぐも

小宮太夫
手段夢助を
用ゐを図

まで。伊勢参宮の揃を着し。ヤアトコセイテ囃しましてなんだ
そばやの浅草苔のようにひどいものでござりますさんでも面白やと
ちよん胴ハ縞の上の絣。所々を繕ひさして引抜当る衣裳で
きめなさりまし。それと幕切ニ麻鳥ハとふでござります 菱「こ
いつハお出来なされた。小鳥根ハ男根のあるじや。扨其趣向ハ書てるも。
夫を付て臼女命と云ふ額と頬の出て鼻の低イ女が一人。猿田彦
と云ふ鼻の高イ男が一人。手力雄と云ふ力の強イ男が一人。去めて
三人の役者がいるそれハ見いた 嵐吉「それがおりますル。臼女の役ハ継松
さんハどふおらふ 継松「ヲイヤ私しや頬ハ出て居れど鼻ハ人なみじや

見るもの〳〵 嵐「見るも此役ハ福山さんが見いなれど。ちまさんと一処よ
岩戸籠まで狩がないね。ヲツト見い人が有。布袋屋の耳松さん
よしませふ 菱「それハ一番好じや。シテ猿田彦ハ 嵐「此役がむつかしい。
高麗屋ハ江戸へいぬるし。維よしませふ。イヤ見い人がある。寿老屋
の麻八ハ。いづれ芥が俵物仲仕の縫鼻見にきめませふ 菱「シテ手力
雄ハ 嵐「チト見なされど角力免の百足山さん 菱「見もよしそさん。
なら皆呼よせて衣裳を付させし。扨荷物ハ押馬士も手に合
しておきや。道ハ宗良紙ハ喰物が不自由で山が多い。やそろ仕
見からよ大陣へおて中街道筋が見い。私も三十石から川一

夢助
小宮太夫が
機嫌を
みぬきを
渋合もう
図

見ず使人すで行たのにや「むねました「コレ供の者の船ハ三
十石二艘程より切まぜまやせまうろふ。シテ料理人ハ菊下の酒
蒸籠と塩ね乾物らの松魚節白砂糖などが大坂道中に在ても
なんかの用意甘んと云付ました。菓箱もいるまし。府屋の干菓
子も見合に十斤ばかり先にやりて入れて置てくれ。委細ハ先頃
番頭の嵐助に命じて置た。よもや忘れハ致すまい物のなれ
よろしや。サテ道中でもまへや熱き奴どもが。あのなのでさうるが
いくむまんかんぢやるん。河内屋与兵郎方の薬王丸百服など
とりにやりや「嵐和仕ました　ト嵐吉ハ勝手へ行「こちらへのお茶

る迄ハ太公望気で悠々けふ。下稽古まふと皆く引連奥へ行。毛氈ハ
織の隆勤番頭の嵐助ハ汗を流して駕籠か衆を呼よやり馬屋町
へ人を走らせ。船屋へ使をたる。料理人ハ道中にて入用の塩魚積
ね乾物など鰹節よ砂糖よと騒ぎ立。飯焚のおまんハ粮積て
火ハ吹作で味噌をもり。小女郎ハ周障て手おち鉢へ小便して叱
られるやら。継よ六十来ん東の大繁昌なり。座敷よハ舞の下
稽古もよく殺く採への衣装を揃け。手て扇後脚絆までそけて。三味
太鼓もつ拍子ふてもかし立。さぐめ紀唱て廊下より両
の格子へ行りそうれど。仲居ハ兼て心得。床高立紙紙ふ儀式の看

岩戸籠の
遊戯小宮太夫を
勇まーむる
図

十郎左の盃持運び出し。爰助より外ちでめ。脇小廻り逆に廻。
稍酒のうに時でうたゝ〳〵くるゞ。爰助番頭の嵐助と呼「ナント紅
の羽と馬かるの人ぞ為ぬ。採ふてうろ「ヘイ皆〳〵採ふて持ます。馬
士ハ陸〳〵伏人〳〵来る。なれて出ぬやまとよの積をにて〳〵
さ。何時でも出ぬ。おめ〳〵拵ぐ〳〵まセ「ヨシ〳〵大業で有さンレ
骨折代と金十兵投出セば。押ぐひて後を〳〵ぬ。時義
妓でも三味線とう上。天の戸に押昭ぐ。神〳〵ホと。三社の地と
唱ひおセで。袋布屋の耳聖。毒老屋の廉八。昆舎門屋の百宝
山。紙〳〵ひ〳〵の拵へまて。辞出ぬ。幇間ども。太鼓笛を拍子て
雛〳〵さ。も面白ふげ。唱ひさぐ。絶えくれだ。うう〳〵て小寳
ちゑ。間の襖をあ〳〵引あけ。胴ばう〳〵。鼈甲の光。ちゑやと
ざちゝいさ
なを中勇〳〵さ。百宝山ハとろさ。岩の書〳〵る大縫曳やといて
引昭をば。門ともゞ〳〵と笑ふ。爰助恨びきゝと。ハれば〳〵の
間よろハ用さ〳〵〳〵。病れといい〳〵小寳を文蝶も立流。結
し。化粧艶〳〵て二枚櫛。十七八寸の鬱さ〳〵なゝ〳〵引丹赤
女髪結。紙義吉仲居西人。〳〵採の衣裳ときゝ人さ
セて後小酒〳〵帯にさ〳〵〳〵むお義の拵。〳〵ろ〳〵さて立れ
で。爰助ちでめ一座の面〳〵大い小恨び。ぞ〳〵ぞ者〳〵

小宮太夫が方使
夢助我れがごとく
御影まいりの
啓行を
促す図

ヤアトコセイ
ヨウイヤナ と道中節でうたひながらその大騒ぎやうは
と東西の品も長崎紀伊の昆布実も一列千金の費とぞ
爰ぬがむ八百頃てんぢくてんぢく毎に運ぶ出立の賠繻くにと
祝ひ給ふとさぐめ紀出る麻苟立。拡まで見送る兄車仲長蔵
皮幣間八三味を敲ふたくたまひもなつ〻野々紀川節九よ繁
うるハ茶代未曾の伊勢糸ふ。乳ねけ糸りとぞ見へうるる
爰ぬ福山よむふ 山コウ半ふ爲ハ毎ふ紀ふ立て居やトいひれば
福山 ヲイヤ イヤ 一の で 出ふ へ 爰 ハテ 京上りよ船ぐ居てうるるぬ

倭耶郭下之巻大尾